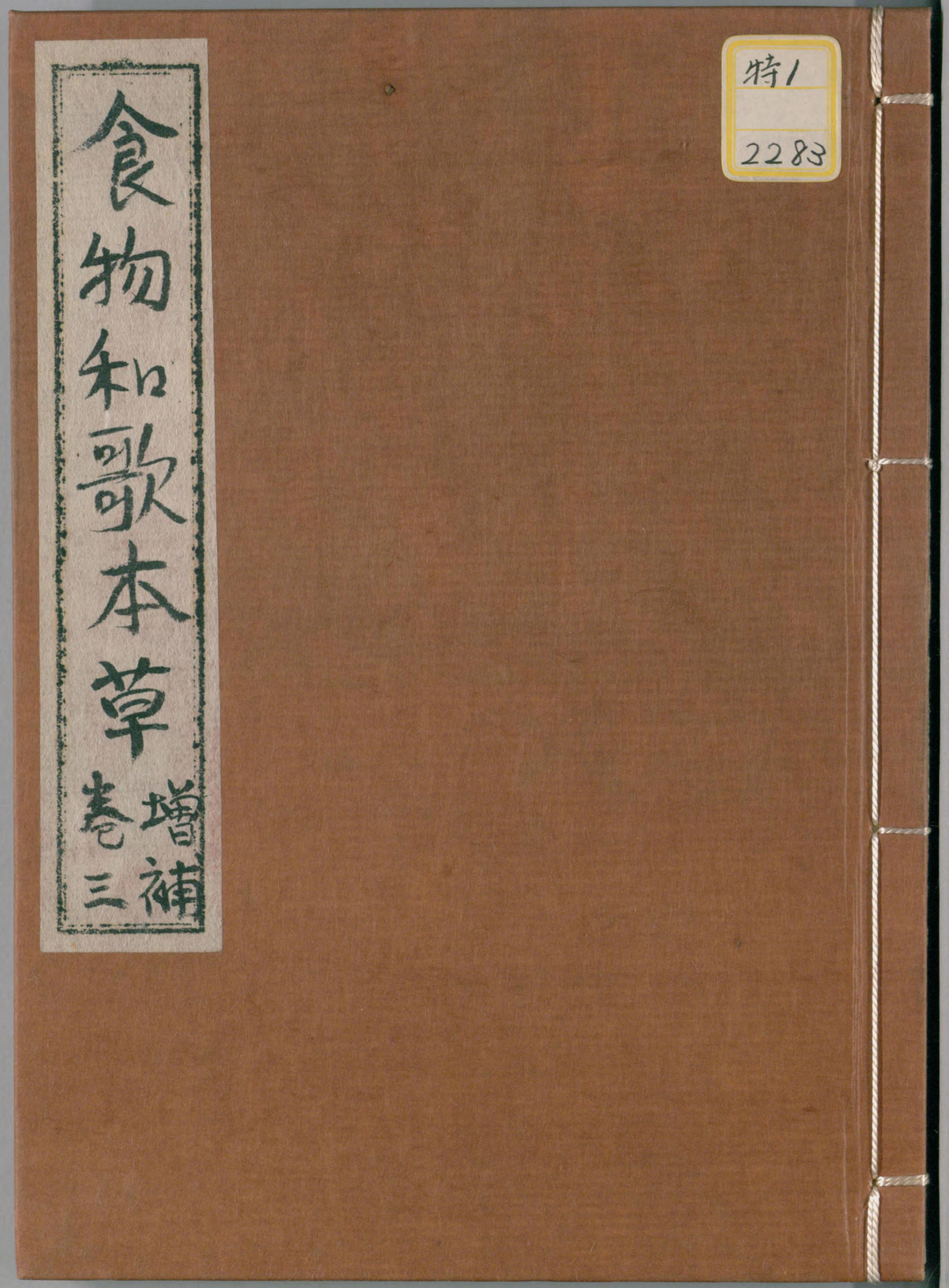


特1
2283

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283

ガラス使用

補物食和歌本草

特 1
C
2283

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283

ガラス使用

よ

○艾（ヨモキ）

本綱

若微温無毒（ニガクビウンナレドモドクナシ）

白井氏蔵書

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283　　ガラス使用

李杲
艾葉ハ吐血下血の根や鼻血や婦気の崩漏なとの
日
艾葉ハ霍乱こむらかへりて腹痛痢病の治りかとよみし
月
艾葉ハ中を温め冷を逐湿をのぞきて腸痛下痢をとゞむ
日
艾葉ハ胎のつきをやすくして風寒もちかへしてさらす治ると
艾葉ハ冷て子なき婦をよろしくはらんで胎いよく安全

○婦脚（ヨメガハギ）

味辛微寒にして○嫩やはらかなるを炒煮して食
なりては又一ひらしゃうと治なく荒る清涼するなり
地より生せしは又こうきゝにかなへり○草さうは草脚気
陽気とらへて生れはし陽又年くるゝとこうやきのと人の
食するのよきとわかれ又いまだ世にめくりとする人乃
いつくよめかとよぶへきを其の白くやわらかきいふへし
しきこそ○草絵ふみかけ婦とよめかくれはりしてへのをとし
利の和し姫萩ハ苦粉より毛あるをもちよめかくさい言なのてや
りくこのさくい紫と葉ありてくろきはよめかこれハ苦林は用なし

とかくに年をとりても毒はなしかるいく気をもしはなるかい
よめかはぎ脈をすゝむれは多そく日まじへの目またる

○穀之部（コクノブ）

○艾餅（ヨモギモチイ）大温 三月三日の草餅ハ昔周の幽王淫乱
さなけれは曲の周のことありて鋤とうあらそひしめ
乱るゝ汝よ此人の家とまろけしふたつ人々草もちを
幽王まて食をしよ王そのむすめひとふたふたり失く候て
まのかこの位なりり宮廟よ数をへしられけり周の代
うへてひきの御さまをつくしけれは後人もらひてかう其と草餅とかへりくゝ
月のり祝やうを食しけるかしけれ十節すくはよりのゝとりくゝにて
艾餅ハ古年中也と云ふ鏡艾を餅も湿されは温みるてし
艾餅ハ温めて腰腹の冷をのそくによし寒気をさりて出すめる人のミ
艾餅無毒にさうく気をめくらし脾胃の冷気をとくとそいふなりけり

○菓之部

○蕗薹　学須よりて古来二月の詩歌と対
多くもいへども骨人のものとしてかく庶人のまでにも肉人
人知のおかげりおのづから
やくそうそうやそうのゆへ世
そんなものでもそうでもありざまそう

蕗薹や　なりとも咲く　菜畑
蕗薹　独活　ほろにがよりも　春の香
蕗薹を　見ひて　気分も　そうでもありそう

○下戸長

下戸長　温泉の　湯治人の　最　疲労
奥之部

○下戸

下戸　なほ　そ　疫　春
奥之部

○蔓菁　本編よりの転写

蔓菁　茎中　空　春
奥之部

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283
ガラス使用

めくハみてしきせうの中ところにて付せんじ葉をそけとる
たとへ時々よく逆とれハみどのあたにおきてまきつるすらしのごとく
氣は鉛の如し二つ也とよくとくかんしるべみてこその事経よ
八蒸ての能毒けあし

蔢蔛(タバコ)ハ冲ハ[illegible]のめ冲けさんハむせようゆ
蔢蔛ハ氣をあらし[illegible]めハ湯氣を去る
蔢蔛ハ食[illegible]

[illegible]して虫[illegible]ふむし[illegible]小さき三ツの[illegible]

○蒲公(タンホホ)【本綱】甘平無毒
たんほゝハ[illegible]毒けあし[illegible]
たんほゝハ女の乳[illegible]けとつ[illegible]血[illegible]
たんほゝハ氣の[illegible]毒とも[illegible]

たんほゝ[illegible]ゆでゝ[illegible]
たんほゝと[illegible]

○萊菔(ダイコン)【本綱】根辛甘温無毒 子辛甘平無毒
[illegible]

だいこんハ[illegible]
だいこんと[illegible]
だいこんハ[illegible]

○葵 本綱 辛温無毒

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』　請求記号 特1-2283
ガラス使用

日 葛の葉なる小腸の和気を除き
日 葛を以ておを久しくつゝを軟し
日 葛を漬を一月乃ち水を去る重ね
日 葛の葉をもつゝみそつゝまあ
葛乃ち冬ふなを肉そもりてつゝあ
葛を漬ハ林そうち葛をあつそ
葛乃種ハ貝とぬりふみ氣そ
ゝりて手を漫め臭を海
たゝ汁そうち金そとれおる
○搭菖 本綱ハ搭菖ハ水邊ニ多シ二月ニ苗ヲ生ス
其葉ハ菖蒲ニ似テ狹ク且ツ短シ其根ハ白ク
ものゝ如ク又ハ三四月ニ花ヲ開ク紫色ニシテ
其ノ花ハ菖蒲ノ花ニ似テ小ク且ツ短シ其ノ
きじの如ク又ハ白色アリ其ノ根ハ菖蒲ノ根
ゝ如ク又ハ小ク且ツ短シ其ノ根ハ菖蒲ノ根
食ベラレ又ハ煮テ食フ小腸ヲ治シ氣ヲ下シ
すゝ者ハ其ノ葉ヲ以テ菖蒲ノ葉ニ代用ス
とゝわ刺ハ出ヲ去ル搭菖ハ菖蒲ノ九ノ一ノ
又ハ搭菖ハ菖蒲ノ如ク葉ニ劍脊アリ
のゝ如ク又ハ搭菖ハ菖蒲ノ如ク葉ニ劍脊アリ
さゝり葉ハ菖蒲ノ葉ニ似テ狹ク且ツ短シ
のゝ如ク又ハ搭菖ハ菖蒲ノ如ク葉ニ劍脊アリ
さゝり葉ハ菖蒲ノ葉ニ似テ狹ク且ツ短シ

搭菖 ゝを以ゝ
日 搭菖ハ菖蒲ノ葉ニ似テ狹ク且ツ短シ其ノ根ハ菖蒲ノ根ニ似テ小ク且ツ短シ其ノ花ハ菖蒲ノ花ニ似テ小ク且ツ短シ其ノ葉ハ菖蒲ノ葉ニ似テ狹ク且ツ短シ

日 搖蓑ハ産後にはことに用ゆべし気ふさがりて経そくし眼る
同 搖蓑ハ其の性よく掻痒をさり眼をさし御目をまもるする
搖蓑ニよしと逆気をも下すを見てもあるゆへ気も然もある

○竹子 本綱 諸竹筍 甘微寒無毒

ことくの日本にはなくも竹は竹のは竹の子
白く黒あり竹ほどろく実あり瀬竹竹の
竹まもとる川竹苦竹その竹たちさ竹
竹子のたけのこともさらくまとまに竹の様なり
竹子色ほどいろくの竹子といふての竹の竹
子色物わろしさて日本にはこの竹を竹
とるも本経の部にあるといふは苦竹と竹のなり
のやうに書するに淡竹とえらくと明にあるみえ淡竹は苦竹の
竹にわかりと酒をもとまれは甘い竹の事ものふれの
竹の竹は甘よわれるとこらふれの竹わし麦竹の竹
より淡竹という苦竹とのそこてわれらみえ淡竹といふ字
とえうその竹よ中いて淡竹竹をといふと見ゆにならまく
ちぶとどもことくちど見てうる竹の事

ずつきうのし又子経竹の子はさくさをうらはいふ
らぬとこたけのこハ竹子の部又竹ハ本の部乃来りわり
本草にもわるしは竹子ハにはかりわかりを本にもあ
らぬ竹子ともわかぬ竹のよれとらを作る
本経 竹乃子ハ気を利し気をまして経をのこと気をまし通
日 竹の子ハ痃癖勝気やむの食をハ痛さらまく比りぶ
日 竹乃子ハ熱をもさし御瘡をけし胃をさりやくに痛をと通
竹の子ハ食じても気をまし気をさると虚の人食すへし
竹茹ハ積聚癖痃や症毒を食をハ癖をまさ積や
竹の子ハ腰痛よ目の又肩乃業あるとなり渡の事あるに
竹乃子ハ病に食せば毒ありはかりもつ毒をとくまう

○冬筍 本綱 冬筍 甘寒 淡竹の子なり竹の根あまりふさしておりかへし甘し刈

日本手綱にハかりかきうし竹の子れ竹の子おほく植
出して筍とゆすりの毒をよわくしを根とかりの毒は
おいしき根ハ刈りて根の見つけらるゝ事ハあつさ答に
竹のたけのこの事をおもへ
竹の根のちりのぞもこゝにかくし姑のよく漬とせん
生ぶゆの業をはいつれも食ひとハとる事の[illegible]

果之部

○橙（ダイダイ）【本綱】酸寒無毒（スツカン ナシドク） 皮は苦辛温無毒（ヒ ニガクカラク ウン ナシドク）○消（さり）
蜜につけて菓子とし魚の毒をけしさて湯漬とする煙や
三條 会はすることにて[illegible]

橙の蜜漬八魚鶏の毒をけしきはむるあつもの
日 橙の二日酔をさましむねもとをやはらくる
日 橙の皮は中を寛くし気をめくらし腸胃の気をとゝのへ
日 橙の風気をかはし肝の気を和ける痰をも消す
日 橙より酢同合にさらに呑ば頭をさましてよし
白 橙を粉にして三錢白湯にて飲めばよく
橙の細末痰気のよきを[illegible]世にある
これはてきとうのゝ[illegible]
さる痢気淋病癪の三種は世にも業と称
して人の損をして[illegible]
一あり[illegible]病の[illegible]
純なる[illegible]
年[illegible]病気[illegible]

痘瘡と疱瘡と見わかやすき
疱瘡気なりと膀胱の気塞やすき
痘瘡とかわる事ある時風
のさえぎるものあるひとを
腎気虚七情の大なるもの
をかわげてかかるものまれ
疱とうくるまでわかりがたし
治方初めて補の能ハずして
人の痘をまうつることあり
白すじ毎に一色の痘をみて
取くすべし〇痘疹とりあつかひ
をしまのことくにしてまた痘人
の病をみるにまづ痘人へ湯薬よくして
出人へんまでかわりの薬は疱人へ
妙薬を用俗医ハまことにうるおくの
ハ升もやのことを食事をも
守慎をとげをりて無用のようにしてこまり
ふつつかの名医の病あるんでと平生の
慈しの備医ハ時の病あるとりつく
ようにそそなくんの心を安んじて

ふめくをあゆみをはこぶもののみうくる我師
のまへ父母孝養のたまものこれをうやまひ
つかへ妻子奴僕乃指揮をうけ書よむ家業をうけ
たまはりて伝来乃家宝をうけつぐ家業
をもうけもちまもりてはこぶ
傷ハ我ゐあまと當麻のこそみまろ
歎之部
○
雖 本綱 韋孝寛毎
日ちうそを程ハ望もちる故任官しより
わるとおりてくもとをりて出ぬ乃

本経 狸肉の味あまく気もなし中を補ひ痩風を治す
同 狸とは正月乃ち食する神とやなりて人は利あれ
狸肉を煮て食へは腸へくいめ血をとゝめてめまひ痔を
本綱乃語り温とふ狸もある
狸とは又ひとつ用ひて痔の虫腹痛あるし久痢を治す
狸の骨黒焼て食すれば血を動し瘰癧症悪瘡ましてもよし
本経 狸の頭の霜やき風ひを病して食ひは治す
同 狸の糞くろやきにして服すれはさき瘡を治す
狸の陰茎のつきそ狸をよき男ひて女乃の□
鳥之部

○鴿【本綱】鹹平無毒 注に曰く鳩と云ひ鵓鴿とも云ふ
よろしかくなり人家にかふ…
鴿は…
雲鴿は…
かうろくなり 本経には雄雌…
故其性淫□…
とらへて…
とらへ…
本経 雲鴿乃諸薬乃毒を去りて又ひらきし疥瘡を治す
同 雲鴿は精とその気を益て悪瘡風瘡あるをよし
同 雲鴿と酒にて妙く用ゆるは益あるも…
○卵白【本綱】甘鹹寒無毒
本経 卵子白き目あつく赤痛あるとも乃の伏熱さまし…

玉子白ミ小児の泄瀉産前産後の胞衣のおりぬに薬なり
古酒にても生にてものむなり

玉子白ミと赤小豆の粉とハかさませて一切の癰毒腫にぬれ

○卵黄【本綱】甘温無毒

本経 玉子の黄を酢にて煮て食ハ産後の虚痢によし

玉子黄生にても煮ても小便の疾をさるなり

玉子の黄ハ陰血を補ひ熱毒を去る也

○卵【本綱】ハ白ミと黄ミとふたつあり黄ミ陰血を補ひ白ミ気を補ふ
黄ミ白ミの徴甚しく黄ハ陰血の濁く合て一つ也
し又微冷なる事ともなし
酒にて煮ハ濁くなると玉子の白ミとあそふなり
子なきは雅音にて人の濁まりと

一さらにそそくつおまりおさへて男をあててめありかし性ハ平らにして手経の
阿膠の性と同じ事なりと古人いひしと

たまご酒 玉子酒 男らわたらひをほすこと 不和ろたひあめ

本経逢原 玉子にて手足ひえて痛む色下血なと吉なり

玉子こそやまひ人にまた肝にやしなひ腎をつよくす

玉子それ心をも血や白血をも去る事なり

玉子こそ陰と涙し風のそくさとも腫をもやす

玉子こそ悪毒を消す物也ハ瘡疥を治すとぞ

玉子こそ久しく気とまして力をつける

婦人くるしみて肝にみそけでまれ料理をのせ

魚之部

○鯛　和名多比　用ひ数　形色共に人の知る所なり　其性と食毒とあり　多食脚蒲　害改下見　魚猶之有　万葉集の毛千ふ浦潟り照の名とも詠めり

鯛は温之平也　主脾胃水腫の病と気もり　鯛脾胃乃元気を補て気血和平の妙薬なり　鯛ふく煮つふく方ま　心と骨とを去て煮すふそこ

○花魚　和名ツボダイ　クロダイ　うるさい鯛とおもふ　たひもよまり中人以下の食とし　花魚和名乃しるし又くろだいの字もよまり

○穉魚

なまと温気乃よき病ふ忘血をそそぐ　なまと温気乃よき病ふ忘血をそそぐ　なまこそ悪性の業病乃人ふ食をあてそこ

○黄頬魚　本綱　其卑微毒　行ると云ふ　其卑微毒　行ると云ふ　本綱の先日本の鯖をして痰痕を発ふ　ふぬもこそ多れそこそ　ふぬもこそ多れそこそ

鯖ふく湯と醒との小豆と煮一菜粮乃新　鯖ふく湯と醒との小豆と煮一菜粮乃新　鯖ふ風とそこそ傷をのふ　鯖ふ風とそこそ傷をのふ　鯖乃魚大温ふて下脚や腸胃冷気乃そこ　鯖乃魚大温ふて下脚や腸胃冷気乃そこ

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283
ガラス使用

○鷽臭 本綱 辛溫主毒 治小疳殺蟲 久食令人多忘 其血療瘧 其肉補虛損 治小兒驚癇 其膽明目 治小兒驚癇 其肝治小兒疳瘡 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇 其血治小兒驚癇 其肉治小兒驚癇 其膽治小兒驚癇 其肝治小兒驚癇 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇

○鼠臭 本綱 辛溫有毒 治小兒驚癇 其肉治小兒驚癇 其膽治小兒驚癇 其肝治小兒驚癇 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇 其血治小兒驚癇 其肉治小兒驚癇 其膽治小兒驚癇 其肝治小兒驚癇 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇

虫之部

○田鼈 本綱 其大者如手掌 其小者如錢 其色青黑 其肉白 其味甘 其性寒 其毒微 其治小兒驚癇 其肉治小兒驚癇 其膽治小兒驚癇 其肝治小兒驚癇 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇 其血治小兒驚癇 其肉治小兒驚癇 其膽治小兒驚癇 其肝治小兒驚癇 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇

○田螺 本綱 其大者如手掌 其小者如錢 其色青黑 其肉白 其味甘 其性寒 其毒微 其治小兒驚癇 其肉治小兒驚癇 其膽治小兒驚癇 其肝治小兒驚癇 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇 其血治小兒驚癇 其肉治小兒驚癇 其膽治小兒驚癇 其肝治小兒驚癇 其腦治小兒驚癇 其糞治小兒驚癇 其尿治小兒驚癇 其皮治小兒驚癇 其骨治小兒驚癇 其毛治小兒驚癇

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283
ガラス使用

田螺と腹痛つることをかく
田螺とかくれの病淋病や痔
田螺肉くさの巳ら腹痛よりそようきも
田螺とは生てすりて傷をよく
田螺とはすりとりて腸よく通ず
田螺性冷利気を分腹ちさまし
田螺とは壱一ぴきを今よく煮ゐて
れ
う

穀之部

蕎麦 本綱 甘平寒 毒
そばは甘く辛よく気を通じ気力ましそこいきたりよく合する風を病めまひ
そこぢれ半風肺気やき痒の毒気ありて若し世活を止
そこなふ 和名抄 加保波牟岐
○蕎切 蕎麦、白腸の淳
もの多くは胞合のふ
ふるわえと蕎切と胞合の熱のおり
そう蕎は腸胃を寒ふ合ふる病
まばら腸の病気を治する
乳おを和らぐる言わうち世活
蕎麦切は胞合をおし胃税を
蕎麦切とおなじく合するを血を生ず
蕎麦切とおなじく合するを血を生ず花同合熱風そや

○索麺（サウメン） 温（ウン）にして毒なし 経をあまして小麦の粉に油をまじへて
みや嗌麦（ヒシムギ）麪麦（アツムギ）（ニウメン）の麪の粉ハまづ小麦の性なるゆへ冷なるなさ
粉にしめる名なり 索ハ索（なハ）をよめるなりそうめんなるべし さて麺と麦を

索麺ハ冷物を食へ霍乱や虫積しもあるべし

索麺ハ気をよく下し腸を厚くすると寒し閉ぞする

索麺ハ移りくすりの上悩難を風気郭て滋循となる

索麺へ俗に熱び食すれバ飯ハ黄疸とやむ

索麺やさらに麦より悪ざしも薬の山に毒をとつまじ

あとさしとハかは大麦の実にてまいもてにうぶは
いわゆる麦ねとらんをまそ 所どころハこよりのやうにまわり
とるとをりて ひまけとりて果子とするなり

○鼈豆（ソラマメ）【本綱】耳（アラ）微（ビ）辛（シン）平（ヘイ）無（ナ）毒（ドク） 本綱に微温 蚕豆（ソラマメ） 胡豆 鼈豆 ともに同

とそらまめと和訓し 何も元微と甘温の二種ハ草薬の説
なれは豆の教よあつて蚕豆ハ 性は飢荒案の まちまちとさ
を考えに蚕豆とひかうぞり 鼈豆の性は 同様の説は
鼈豆ハ八月に種をまく冬苗の生じて 村に苗をもふ
通し りさ四月に中うにむかふのそ 成ならぬはまろくされ
とかり一枝にて荒ふるとぞ 今元浄農家よりまめそを
つくり見るにて 蒔時の説のとし 花ハ二月さくと元日本
にてハ三月にさくも 句綿 椛ら中ふるもおもてとを冬 正月の売ある
ようゆるとを待り 中くのかの
今に物なり

そら豆の八胃とふくよく蔵腑とを利するものとそんのなへき
又何様の説は一人世にあやまり十升とのもしは 続当治
するまいおさいぶらん ふあつ八鼈豆と飛蔓とくふへさ
あうしてへいく八は二通と見合して大便の 計ありとくまれ
臓腑を利する者なりと云て おくハ多く合して ハ積くする
べきものとぞ豆の花ハ温なりと云 蚕もわるべきとひ
ともの本にするとし

草（クサ）の部（ブ）

つ

○土筆　和名つくし
あるものこと今つくしといふものなり
俗語よし

ほろくし　温にて飛やうの毒症ぼうこう周ひ毒多し
ほろくし　血をとうし肝動
ほろくし　湯煮してなます
ほろくし　風をとうし熱をさまし
ほろくし　虫積疳疾よし婦人

○茅蒐　本綱　茅草芽
とり行うこと二月より九十月の内をもちゐる
元来つくれどもこのたぐひなり
ようつくれどもよろしからず
それよりくさ

○露西　本綱　鹹辛毒
ほ小毒をもつて黄なり
白きを用ゐそれ白きをもつて
もろこしの紅花のごとし
写つり丹漆おとす用ちさ脾
ほ頻おとさ脾
水ちこ二升に粉の如くなるまで
ようすれば風をとうし
そのまま風気
そのまま風気

ほろくし　胃健よし腎をつよくす
ほろくし　痰をとうし
ほろくし　小便をとうし
ほろくし　水腫よし

○鳥兒腸
○露西　本綱　鹹辛毒
ほ小毒をもつて黄なり
白きを用ゐそれ白きをもつて
もろこしの紅花のごとし
写つり丹漆おとす用ちさ脾
ほ頻おとさ脾
水ちこ二升に粉の如くなるまで
ようすれば風をとうし
そのまま風気
そのまま風気

本條
露の白汁乳をまして風
露の辛白きをとるのみ

痢なく胃の気を扶け扶持の
痢を療治久しく頭を悪くする
痢の卵黄つく蛇よわる虫(蛔)を下して
あるを流動の扶あるとき
に漸く快気あり一子疳虫なく
生まりとふるとの扶あるべし
○の字と用ることなるものやあ
つまを二ハ不の字通よ婦そして
入るさに一粒丸で用ふるべし

痘瘡あるときは力と扶持りられ
たらず危とあげ扶よ
を一人乃至二人分ふべし
勿論の事なれども
参りてを能ものを
作るべし

○扶持

ほうれんそうを能ゆでて
○鞠
つくり干梅肉よ吉野つを通
猪の脳みそうを

ちくさうを神て氣味よくして毒を
○蕙 本綱 破血 下氣 治心腹
ムくさうのはびこりてさらに
とあり日本のつねあるものにも
らばなをけ用ひべし 肝の
社日にうゑ植るをよしとす
をつゝ記あり 成己の日とりけ
よ稽古ものつゞあるをそこそ
事記よりつゞきあるをそこそ
ふんへもあるしとなり
蕙 ゆうかう 乃神氣をそこのひて
蕙乃うん 湯 熱病や 頭風 あつ咒 とあり
蕙のうんを見て宝 食 の病 を
又生食 の病 を

あるまはつゞあるをそこのあるうんをそこ
石ゆうのねをとりくて
蕙乃うん あたへうの方
ハ日へのまあるくそこのあるうんをそこ
蕙平々 癒 こうじ
蕙二次 血 脈 の用 ハ梅 ヒ心
蕙二次下血の薬又底乃血の
ね 苦参 根
○蒿 算

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283
ガラス使用

嵐蕈わかく冷そ出候ハ百病の毒
嵐蕈多く食すれハ人を殺すこと
○糠漬 歌ノ部
糠漬ハ糠味噌に漬置候茄子の類
家のつくりやうハ家の大小ニ
のごとくにして出るなり
うれ茎ハ従俗のこと
の二種とこゝにハ
糠漬ハ茄子漬ものを漬すに
糠味噌ともの腐ニ
歌の部

○嵐茸 本綱 茸生 毒蕈
多嵐といふハ初て
さして白き嵐也
牛馬の糞
牛馬の糞ハ
肉ハ
肉ハ

手條 脇の手へこゆふんとうしろへもつれ
杉折しきを乃ぬしまくら
嵐漫の寝よ桜も少くも
日
嵐とそ雪ふりつもる桜の木
嵐肉附乳しなまめかしきおもかげ
嵐つゝよ晩ふつをそ妙
嵐とそ雪ふりつもる桜の木
必何様乃紙よ受取く
逸一冨と耳よ開枝と瞳みの泊と標
歯となる嵐とふれよ屬を同衾のみ計
○よふそ民り少冨とうくわう枝の身とくう

手條
嵐とそ雪ふりつもる桜の木
貴とうつくしきを
嵐みくそしてもつをそ
○嵐黒焼
手條
嵐寒腰枝のくもりてても
日
嵐寒小そ毎日産おふ
嵐の裏と着とり切て
右嵐乃ふんこうもう
うるし肥衣枝もつ

○荵 本綱 耳澗毒

の葉ふまし白菜ともしろし

とこゝろ大こ菜の汁ま

のみ田よ生ふるみとこゝろ

おゝり山ふ氷のごく

ふるやうをするやうに

山み菜ハゆでのちをまくあ

もあをさゝをまくあ

ばかり生ふるやうにそしも

あるまじきやや

浮菜 陽雪 利尿の

浮菜を食ふ氣 根

浮菜を中毒 大小便を

○猫肉 本綱 草殺澗毒

ありふの形ふこまかく

午卯頭いとすゝしく寅申

辰戌丑未ハふつめの様

明ふ朝のうち一日ふつかしく

諸毒ハ慎夏至一日則

移ふこハ食ふもまふあふ

きわざなまうそそぐ

みをふるすゝ 猫中風脚気ふよく

猫ハふく心気労瘵痔毒

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』　請求記号 特1-2283
ガラス使用

浮萍ハ久しく服すれハ身かろく目をあきらかにし鬚を黒くす
浮萍毛を生にて細末し鶏卵の白に合せぬれ
又一種紫背浮萍蘋藪と云ものもあり是ハ和刹(?)
紫萍ハ五月中旬に取て陰干にして用ゆ
もろこしにて陵王(?)と云もの也
浮萍の毒にあたりたる人ハ
毒ある人ハ...
人ハこれを...

○茄子（ナスビ）　本綱　甘寒ニ無毒（アマクカンナニドク）

俗に茄子ハ数種あり　紫なる茄あり白きもあり又これを...
紫茄子也...
大抵ハ...
大なるハ...

茄子とて蔬菜の中にハひとつ益なきものとかねてしるへし
茄子たゞ冷る人ハ食すれハ瘡や痼疾をたつるもの也
茄子又ハ諸虫をさけほして癜瘡と首は犯るや痰血を生す
茄子とハ物ハかし食すとも多く料るハ益そわつらふ
茄子それ胃の腸損して気を動かし又ハ目をも損する
茄子をそ鹿乃毒に世話に云ニまぶるゝもとくこりゆるへし

○薺（ナツナ）　本綱　甘温ニ無毒（アマクウンナニドク）

薺ハそ中を和し五臓を利し根ハ目の痛をとむ
薺根をとりてしほりて汁を目にさし血をとむ
薺をハ根も葉も共に焼て散剤にして山...

蒴を肝気を利し気を順し麺毒を解し
蒴を瘡の毒を治すること
蒴子 苺く年也 風毒の熱気を去る
蒴を年月日ふるを用ゆ
壽命 目のくらきやみを治す
蒴をはまぐりの賢くふるを粉肉同食禁む

穀之部

○玉蜀黍 本綱 茸年毒 ほこ蜀黍 肥えてせいひょろく苗小さ

また洲にて七月に花さき九月の末
より日ありのみ ごんさひょいおきこひげ
しまるとうもろこし レハりつくり
ふりひろひとわれ別もろこしと
なまこひ年を細胃とひろく粉
もの病ともろ石淋もろ
○納豆 漢名納豆 唐納豆 古大豆をあぶりて
あらくうすの川ひきまぜ
まろこれをとりまぜ
とる疫病よろくなやふぐ

納豆 大温みて一切の毒をくだく海
納豆 ふうのちをこ痢血腸を
納豆 小便ありて夜通てそ
○刀豆 本綱 茸年毒 刺の毒を解す

二夫豆の葉のごとくにして楕夫よりも円く尖りて
ちゐ蛸の形のごとし莢とともに
つるのごとくはえまつはりそのつるよりこれを
手係 たぐりよせくるひあり
刀豆 中を滋氣をとり腸胃
刀 刀豆 元を補ひ腎をまもる
右手綱の如くなりさやは
いろいろ有て其別也手綱
毛ニトン
の日本のみさまめいぼ
グヨリ
豆食てとを能毒とす
らく右の如き一の云首つぎ
の如し

刀豆 味あまく辛 温にて無毒
刀豆をもつて灸瘡の
刀豆 血をとめ
刀豆 癰疽并瘻大風の
刀豆 腎を滑にする血
刀豆をもつて洗ふ
刀豆をもつて煎じ
十二コメ
○生米
生米は血をとめ吉毒をなほす
生米をもつて舎利
果子之部

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283
ガラス使用

○棗（ナツメ）【本綱】甘辛熱無毒　俗に云大なるを棗といひ小なるを棘といふ 棘は酸棗也

棗の字は[illegible]棗の字を重ね棘は[illegible]棗の字をならべたり [illegible]の[illegible]より出て[illegible]大なる[illegible]つめ[illegible]ちいさく[illegible]又[illegible]て[illegible]山[illegible]かゝ[illegible]して

生なつめ多く食すれば熱をやみやせたる人の食すべからざれ

○乾棗（ゴニクエツメ）

よくほして[illegible]たくはへても[illegible]しとくぞ[illegible]これせんやくによりて[illegible]ふくむ[illegible]とりそへ[illegible]つけて[illegible]なるも

乾棗は中を安んじ脾気を養ひ脾胃を益し力を[illegible]

乾棗は十二経をもめぐらして[illegible]のちをぞ[illegible]

乾棗は身をうるほして精をとめ五臓を補ひ[illegible]を治す

乾棗は足[illegible]をよくして栄衛をめぐらし[illegible]湯と[illegible]

乾棗は薬の毒を消し[illegible]百薬をまじへてせんじ[illegible]

乾棗は[illegible]多く[illegible]て生[illegible]

○梨（ナシ）【本綱】甘微酸寒無毒（アマクスコシスクカンナシドク）

消梨 香水梨 乳梨 鵝梨 水梨[illegible]

[illegible]一梨の熱を[illegible]大なるは[illegible]

消梨 香梨 甘棠[illegible]

[illegible]こゝに[illegible]又[illegible]に[illegible]精[illegible]梨[illegible]の[illegible]なり

[illegible]五月[illegible]八月[illegible]七月の[illegible]に[illegible]

[illegible]山の[illegible]本綱[illegible]梨[illegible]八[illegible]梨[illegible]これ[illegible]

[illegible]山梨の[illegible]に[illegible]七月の[illegible]の[illegible]

[illegible]と[illegible]山梨の[illegible]の[illegible]いふ[illegible]と

本綱
梨こそハ中を冷し熱を去る也金瘡乳婦血虚のものハ忌

同
梨こそハ熱の渇やむる也よし切てやけどに付るを吉

同
梨こそハ大小便を通しけれ傷寒発熱よく治するを

同
梨ハたゞ痰毒酒毒を消しぬる也熱痰咳嗽ひとをしづむる

同
梨ハたゞ喘息心をしづめけり熱狂なるをよく治すれ

同
梨ハたゞ寒きのもの痼此の病にハ食ふ勿かれ

梨ハたゞ目のあかきやめ赤気を散じ耳鳴を治す

梨ハたゞいつもよく痛や多食すればあしき

梨ハたゞ冷えて中寒を食すれハ泄痢するなり

梨こそハ多く食すれハ中を冷し痿痢をもなすとぞ

梨と世に名をつけて痰をしづめ咳嗽をもよくとゞむ

○氷梨（ミヅナシ）本綱に出す此ハ用ゆ上品の梨子にて

氷梨ハ葉よりも名ハ住みて

○鹿梨（ロクリ）本綱 疥瘡（スクシヨクカン）無毒（ナシドク）

山梨と俗にいふなり疥瘡にもよし 二也ありとも

○梨花（ナシノハナ）

梨の花くらんで目のまへを

梨の花酒にて服す

○鯔魚（ナヨシ） 本綱 甘平無毒（アマクヘイナシドク） 魚（ウラ）の部

鯔魚ハ江河浅水の中に生ず

まろく切りて扁によりてやわらかにして　ゆでゝ酒とせうゆかけ
肉形の鋭りやうりを生ずるとぞ

なすひこそ胃をひらきて又腸利しやまひあらくを肥しそ益

なすひそ口うとゐて百葉にいれはこしらへをもとめ

なすひ冷腸風下血す用ひ上氣とてこしらの痛をこさむ

なすひは寒氣を補ひ脚瘡を含をゆして氣あとまれ

なすひとは多く食すれは生病やうを腹あるへし

○茄（ナスビ）【本綱】甘寒無毒　なまりハ下のへしかうすなとで八毒あまへ八

なまづ温小毒ありて用ゆへし

なまづ温小腹のに氣をうんて膝らかそさき

なまづ少は瘡と又病肉牛をもきらふ物く

同 なまづら瀝と云也能く白食すれハいうくさいをうるも

同 なまづハは目のうち赤く髭あるを黄なるは八分こうるへし

○鯰（ナマズ）【本綱】甘温無毒　俗ハ鯰ハ鮧魚の肉とうしと読ふ
くろう　とふめのくて食ひ肉に合雑して生まへ下うか
ふしのまゝにて肉とはなそて食すれ八よく煮熟してたへる
少はなり出ともしのわかるとき

同 なまんとハ白食まるうす口はしら積とまるとひそかに

同 なまんとハひその性はあのむるで姜とましで後やつてまき

同 なまんとハ変きらふ也酸氣ハよく収斂を先霍乱とする

なまんとハ生積あるよハかつて胃の氣をひろき食をするもの

特 1
2283

（）生海鼠（十二コ）

あまこ冷。精を益す。痛を治す。

ほしこ腎の気を補ふ。

なまこと食ふ時は疫毒を解す。

（）生蚶（十二カキ）

かきはうきの赤くなりたる生物をとりて酒なんど煎じ

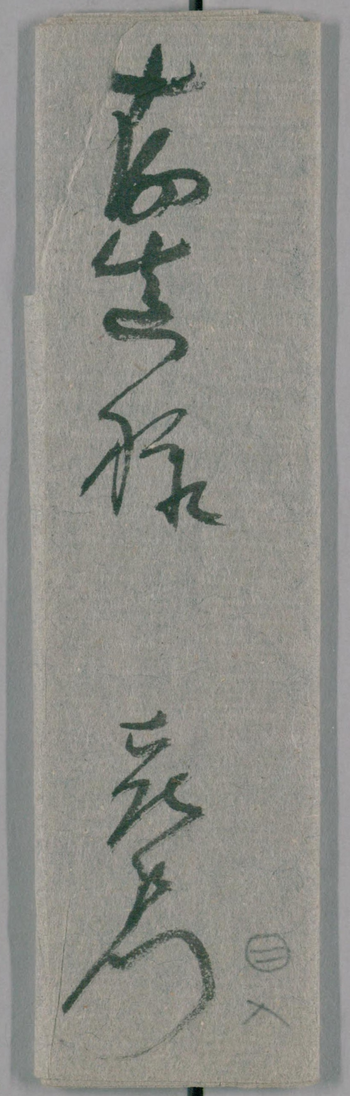
国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』　請求記号 特1-2283
ガラス使用

特 1
2283

（）生海苔（ナマノコ）

あまこ冷（れい）痔痢（じり）の毒を消（け）すこと神（かん）の如（ごと）し痛（いたみ）を治（ち）し血（ち）を養（やしな）ふ

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』　請求記号 特1-2283

ガラス使用　　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283

ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283

ガラス使用　挟み込み物

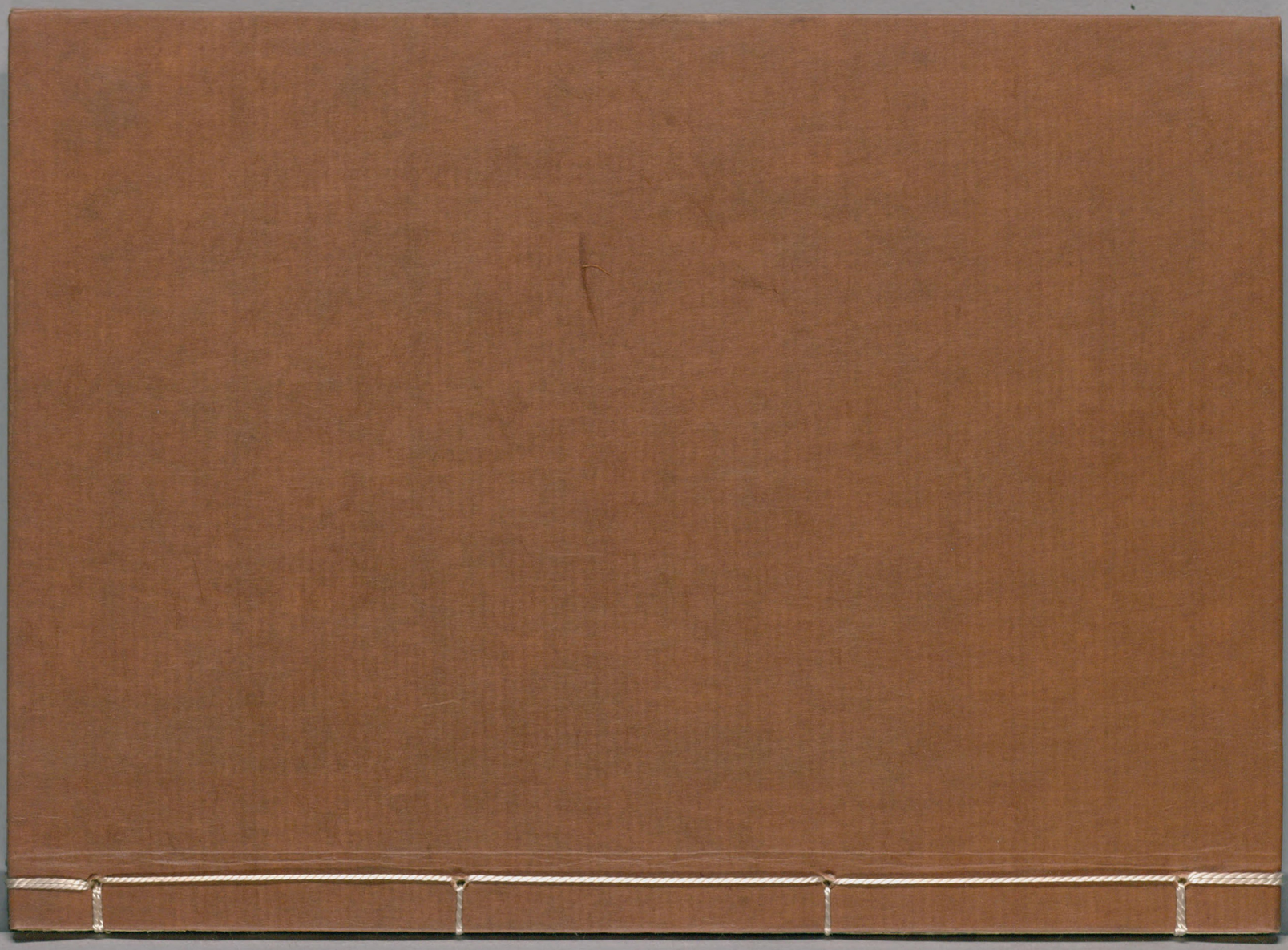
国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283

ガラス使用　挟み込み物

特1
2283

国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283

ガラス使用



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『食物和歌本草増補 7巻』 請求記号 特1-2283